

ISSN 2188-2576

# 越谷保育専門学校研究紀要

第3号

平成26年度

学校法人ワタナベ学園 越谷保育専門学校



## 研究紀要第3号によせて

越谷保育専門学校長 山崎 芙美夫

日本の人口は、世界に例のない速さで少子高齢化が進展しています。このような状況のなかで、待ったなしの政策テーマの一番が「子育て」である。全国のお母さんたちが子どもを産み育てやすい環境をどのように構築していくのか。消費税増税分を子育ての拡充策につかうことになっていましたが、増税が先延ばしになりどのような展開になるか予測ができない状況です。同時に幼稚園と保育所の機能を備えた「認定こども園」などを増やし、主に待機児童の解消を目指す方向が決まっているがこちらも予算の面で難しい面が出てきています。政府は先日平成27年度予算に平成27年4月から実施される「子ども・子育て支援制度」に5100億を計上することを決めました。また、「認定こども園」を増設して待機児童の解消と、保育士の給与を上げて、定着率アップを高める柱とすることになりました。

さて、教育再生会議の第五次提言におきまして「実践的な職業教育を行う高等教育機関を制度化する」として答申されました。現在有識者会議で新学校種の基本的方向性が議論されており3月末までには中教審に報告される予定であります。これに先立ち専門学校においては平成26年4月より新たな文部科学省の認定制度がスタートしました。平成23年1月中央教育審議会答申「今後の学校におけるキャリア教育・職業教育の在り方について」において職業実践的な教育のための新たな枠組みを整備すること」が指摘され、これを受けるかたちで文部科学省は平成25年8月30日「専修学校の専門課程における職業実践専門課程の認定に関する規定」を公布し施行されました。その結果平成26年度全国で470校1365学科、埼玉県では10校23学科が認定を受け、文部科学大臣認定の新たな高等職業教育学校が誕生しました。文部科学省はこの「職業実践専門課程」の普及促進・検証の予算を計上し認定校の増加を応援しています。

このような変革期にあって本学では幼稚園教諭・保育士養成機関として教員の力量向上を目指して研究活動をすすめています。これまで教員研修会の間として毎年2回の「講師会」（平成26年度前期講師会講師として文教大学教育学部特別支援教育専修成田奈緒子教授テーマ「早起リズムで脳を育てる親子支援の重要性」・後期は全国認定こども園協会代表理事・学校法人若盛学園理事長・認定こども園こどものもり園長若盛正城氏テーマ「幼児教育者養成校への期待」予定）を開催してきました。平成25年度に「紀要委員会」を校務分掌に位置づけ、ここに「平成26年度研究紀要第3号」として発刊することができました。本学のミッション「学びつづける保育者」育成のため重点目標を定め教育活動を積み重ねています。内容においてはまだまだ不十分なものでありますが、今後さらに研鑽を積み重ね優れた教員の人材育成に少しでも貢献できれば幸いです。

これからも皆様のご指導、ご鞭撻をよろしくお願い申し上げます。

## 目 次

研究紀要第3号によせて	・ ・ ・ ・ 山崎 芙美夫
【特別寄稿】	
森のようちえんにおける地域連携の一事例	
—ぼかし肥作製から始まる農業体験実践報告—	・ ・ ・ ・ 内保 亘 ・ ・ ・ 1
【コメント】	
森のようちえん・ちいろばの挑戦	・ ・ ・ ・ 三谷 高史 ・ ・ 11
【論文】	
Mobile Phone Use after Lights Out as a Risk Factor for Mothers' Chronic Fatigue: Cross-Sectional Survey of Japanese Mothers Rearing Toddlers and Preschoolers	・ ・ ・ UEDA Kousaku ・ 16
(幼児を持つ母親の夜間の消灯後の携帯電話利用と主観的な慢性疲労感との関連 —幼稚園・保育園をフィールドとした中規模横断調査の結果から— 上田 厚作)	
幼児期の親の関わりと子どもの行動	
—親アンケートによる探索的予備調査—	・ ・ ・ ・ 高木 真理子 ・ 24
学校と地域の連携の展開と課題	
—コーディネーターの学習機会と協働関係—	・ ・ ・ ・ 西村 彩恵 ・ ・ 32
保育形態を変更することの難しさ	
—A 保育園における実践検討を通して—	・ ・ ・ ・ 齋藤 信 ・ ・ ・ 40
月刊絵本『ちいさなかがくのとも』の分析研究	・ ・ ・ ・ 山崎 英二 ・ ・ 50
【図書紹介】	
内田伸子著『子育てに「もう遅い」はありません』の紹介	・ ・ ・ ・ 高木 真理子 ・ 60